

茶の湯文化学会会報

No.100
特別号

第100号／2019年3月28日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

茶の湯研究をふりかえって

熊倉 功夫（現・第四代会長）

会報が一〇〇号を迎える。ということは茶の湯文化学会が創立されて二十五年の節目を迎えるということ、まことに感慨深いものがある。

そこで学会創立前史ともいべき動きがあったことを思い出咄として残しておきたい。学会が誕生するに ついてはいくつもの芽があった。その一つが木芽文庫 という研究会である。木芽文庫は一九六九年に筒井紘一氏と私で作った。当時、日本史学でも国文学でも 茶の湯研究というテーマは市民権を得ていなかった から、研究論文を書いても発表の場はほとんどなかった。それならいっそ自分たちで茶の湯研究誌を創刊しようと思いたち、協力して下さる出版社があつて『茶湯』—研究と資料—一号が同年の七月に刊行された。その出版母体として木芽文庫という研究会を立ちあげた。会の名前は幕末の国学者前田夏蔭の茶史『木芽説』から取った。

今、第一号の冒頭に記した「はじめに」を読みかえすと、学園紛争のさなかであることを映しだすような

会報一〇〇号二十五周年を記念して

（一〇〇号特別企画として、歴代会長を務められた方々に一文をいただきました。）

いかにも青臭い未熟な論であつたが、その大筋は誤つていなかったと思う。むしろそこでうたつたことが未だ成就していないことに忸怩たるものがある。筒井さんは二八歳の駆けだしの裏千家職員、私は二六歳の院生だった。

やがて京都で木芽文庫の活動がはじまった。当時、北区にあつた吉倉運雄氏のマンションが集会所となつた。ここで学会創設が模索されたのが一九七二年ごろであつたかと思う。茶道史研究の大先達を網羅した発起人名簿を作成した覚えがある。しかしあまりにも早計と判断し学会設立は諦めた。その後木芽文庫の活動は継続され、『茶湯—研究と資料—』も一九九四年（平成六年）に二三号を発行して廃刊された。あとがきの「終刊にあたって」という文章の中に私は次のように綴つた。

平成五年秋、茶の湯文化学会が創設された。二十余年前に木芽文庫でも学会設立をめざして会則づくりや計画を練つたことがある。その時は時期尚早といふので廃案にしたが、今回は先輩の先生方の尽力で実現した。学会の主たる活動の一つは会誌『茶の湯

『文化学』である。平成六年十月二十九日の大会にはその創刊号が刊行される。かつて夢みてきた学会とその会誌が実現されたのであるから『茶湯―研究と資料―』の役目もここに終わったと考えるべきであろう。

学会設立の一つの水脈として木芽文庫の活動があったことをここに書きつけておきたい。

私にとつてもう一つの研究会が大変大きな刺激となっていた。一九七二年ごろに生まれた「茶の文化研究会」である。誕生のきっかけは茶文化研究者の松下智氏との出会いである。松下氏はしばらく高校教員を勤めたのち、職を辞し、全くの在野研究者としてアジアの茶の源流を徹底して踏査した人である。氏は一九六九年に『日本の茶』（風媒社）を出版した。これを読んで、狭い茶道史研究に固まっていた私は衝撃を覚えたことを記憶している。茶の研究の人類学的視点や民俗学的視点が松下氏の専門とする育種学と一体となつて茶の文化に広い裾野があることを教えられた。その松下氏が突然、目の前にあらわれた。松下氏は当時、茶の博物館構想をもつておられ、図面まで引いた設計図を作っていた。それを人類学の泰斗梅棹忠夫先生のところへ持ちこんだ。先生は松下氏を激励すると共に、

より茶についての専門家である林屋辰三郎先生を紹介した。林屋先生は松下氏から計画をきくと、当時先生の助手をしていた私を呼んで、まずはそのための研究会を開いてはどうかと示唆された。そこで茶そのものの研究を中心に茶の湯の研究者（村井康彦氏も常連となつて下さった）、茶葉とその歴史的研究者（宇治歴史資料館のメンバーや宇治の茶業家）さらに育種など理科系の研究者（橋本実氏など）、陶芸家や美術工芸関係者、茶人など、さまざまなメンバーが集まつて、にわかになつた新しい研究会が生まれた。その中で茶の源流について人類学的興味を抱いたのが守屋毅氏であった。

守屋氏は愛媛大学から国立民族学博物館へ移るに当つて共同研究のテーマに「茶の文化の総合的研究」を掲げた。共同研究員には「茶の文化研究会」のメンバーが多くを占めた。のちに『茶の世界史』の名著を出版した角山榮氏や『茶道史の散歩道』などの著書のある林左馬衛氏もいて、各地の調査も行った。

松下氏に率いられて守屋氏と私が韓国へ調査に出たのは共同研究がはじまる前だったと思う。井戸茶碗の窯跡の調査や崔凡述氏を山寺にたずねて『韓国の茶道』の著作について

おうかがいをした。途中、守屋氏が韓国の警察に不審者として拉致される事件があったりして思い出深いものがある。その延長線でアッサム・ダージリンの調査や浙江省や広東省の調査もした。やがて守屋氏は名著『お茶のきた道』を出版。共同研究の成果は淡交社から二冊に分冊して出版された。

茶の文化研究会は直接は茶の湯文化学会にはつながらない。しかし学会の中に人類学・民俗学的視点や茶業史、煎茶文化への目配りを忘れぬ姿勢には、そうした世界的な茶の文化研究の血が流れているからだとは考えられている。

初代会長中村昌生氏が二〇一八年になくなり、その前年には初代副会長の林屋晴三氏がなくなつた。創立時のメンバーは林屋辰三郎、永島福太郎両先生をはじめ鬼籍に入った方も多い。その時の若手も今七十五歳を越えて後期高齢者である。速やかに世代交替がはかられ、五〇代がイニシアティブを取り、新しい領域の研究を切り拓く時がきたのである。

そのためには緊急の課題がいくつも浮かんでくるであろう。五〇代、四〇代の研究者にぜひ奮気していただきたいが、今時、若手中堅研究者の研究環境が劣悪化していること

は十分承知している。一見無駄な研究に時間をさく余裕がなくなっていることは十分同情に価する。しかし、だからといって重厚な学術書を世に問う覇気を失わないでほしい。そのため孤立せず仲間を作り互いに学問的に切磋琢磨することをいつも心掛けてほしい。今それなりに私がここにいられるのは、私の力などほんのちいさなもので、筒井さんであつたり守屋さんであつたり、その都度、私を支えてくれた共同研究者の力によるものである。ことに二〇代、三〇代の研究を志す人びとはしっかり研究史を学ぶ上でも、仲間とのあくなき議論が、何よりも自らを育てる糧となることを理解してほしい。

本学会は他の学会と異なる性格がある。それは純粋なアカデミックな学会ではないことである。私はちょうど五〇年前の『茶湯—研究と資料—』の「はじめに」の中に「茶人自身の自己学習」に研究者は学ぶところが大きいと記した。現実には茶にたずさわる茶人の問題意識と協同することで茶の湯研究は成立すると考えた。むしろ茶の湯文化学会の会員に実技にかかわる人びとの多いことこそ学会が健康体であることの証左である。しかし問題がないことはない。学術世界と疎遠な実技者

にとつて学術論文のスタイルを学ぶことはなかなかむずかしい。ここに研究者の出番がある。実技者から研究者は問題意識を学び、実技者は研究者から思いを史料で裏付け論理化する方法を学ぶ場が、学会の中に設けられたら、より素晴らしい将来が開けるのではないだろうか。

会報第百号に思う

谷 晃 (第三代会長)

年明け早々に茶の湯文化学会から、今年三月発行予定の会報が通算百号になり、それを記念して歴代会長へ寄稿を依頼したいとの文書が届いた。先頃発刊された『講座 茶の湯全史』全三巻が学会設立二十年を記念しての企画であつたように記憶している。そして学会のホームページを見ると設立が一九九三年とあるから今年には設立以来二十六年を経過し『講座 茶の湯全史』全巻の刊行以来早くも五年が経過したわけで、あらためて年月の過ぎゆく早さに驚かざるをえない。

実は会報の創刊当初、会報制作を担当していたのがこの私であり、体裁などもその時に考えたスタイルがそのまま継承されているので、ひととき感慨深いものがある。しかし間

もなく会報担当からはずれ、学会誌『茶の湯文化学』の編集を担当したり、総会や例会の担当をしたりなどしているうちに、いつの間にか会長に選出されてしまった。そして会長を三期務めたのであるが、その責務は重く、楽しいとか喜ばしいといった思いは皆無に近く、悩ましく気の重い状態が六年間続いていたような気がしている。

私が会長としていかほどの成果を挙げ得たのか定かではないが、初代会長の故中村昌生先生、二代会長の倉澤行洋先生以来、私と現会長の熊倉功夫先生まで二十六年間学会が活動を続けてこられたのは、中村・倉澤両先生が基礎を築かれたことによる大きい。当初は試行錯誤も多かったとはいえ、次第に活発な活動が定着するようになり、大会や各地の例会での発表、また学会誌への寄稿など、着実に成果を挙げ、学会の存在が確固たるものになってきたことは疑う余地のないところであろう。

とはいえ手放して喜んでばかりはおられず、いくつかの問題点も次第に明らかになりつつあるのが現状である。そのなかで私が常々思っているのは、茶の湯というものは非常に広い分野を内包しており、学会に所属す

る研究者は特定の分野に片寄らず多様であるべきであるにもかかわらず、現実には一部の分野に足場を置いていて研究者が多いということである。

そしてそれぞれの分野を専門としている研究者は、その分野における方法論をもって茶の湯の研究を行っているように見受けられる。それはそれで決して間違っているとか悪いとかいうのではなく、当然のことでもあるともいえようが、設立からしばらくの間はそれで良いとしても、設立以来二十数年も経過しながらいつまでもそのような状態が続くのはいささか問題があるのではないかと私は考えている。たとえば歴史学の立場に身を置いている研究者は、歴史学者としてこれだけのことは言えるとしながら、そこからさらに二歩三歩と足を進めて云々することは難しいと考える人が多いように見受けられる。もちろん最近はその限界を乗り越えて茶の湯を論ずる研究者も見受けられるようになったものの、まだまだ少数であり、歴史分野だけでなく大勢としては自らが属している分野から抜け出すことなく研究を続けている人が大半で、自分の専門分野は茶の湯であると自信をもって言いまわることが出来る研究者は少ない

のが現状であろう。

たとえば能楽を研究するにあたり歴史的立場からだけで能楽のすべてを解明することはむずかしい。立花であれ、香であれ同様なことが言えるであろう。もちろん研究として新知見や論拠の正当性、論理構成などが厳しく問われることは他の分野と同様ではあるが、同時に茶の湯が内包する多くの分野に目を配り、茶の湯独自の方法論を確立することが必要であろう。

しかし現状はなかなかそうした立場や広い視野に基づく研究論文が少ない。ではなぜそのような傾向が続いているのかと考えると、いろいろな要件が浮かび上がってこようが、もともと大きな原因は「茶の湯学」がいまだに確立されているとはいいがたく、その結果茶の湯研究の方法論が定まるまでには至っていないことに起因するようと思われる。

いま一つ茶の湯は一見するとあいまいな状況を好むとみなされ、研究とは本質的に相容れないと考えられがちである。だからといってそのような状況に目をつぶり、他分野の研究法がそのまま通用する事柄のみを対象としているのであれば、いずれ茶の湯研究は行き詰まりをみせるであろうことは想像に難くない。

い。すなわち一見するだけでは研究と相容れないとみなされる分野あるいは対象をも視野に入れることが茶の湯研究には求められているのであり、この点において茶の湯研究の現状はまだまだであるといわざるをえないし、またその点を克服するためにも茶の湯学の確立が望まれていると私は考えている。

さらにいえばかつての茶の湯研究は、それが内包する多くの分野のなかでも歴史と陶磁器のジャンルにおいて趣味的な立場からなされてきたものが多かったのが、茶の湯文化学会の発足とその後の活動によりようやく研究といえる内容をもつ論考が多くなり、また研究の分野もひろがりつつある。それでもなお趣味的な立場からの発言が少なくなく、それらが研究成果を無視してまかり通っているのが現状といわざるをえない。もちろん趣味的な立場からの発言が悪いといっているわけではなく、またそれらを根絶すべきだといっているわけでもない。趣味的な発言ときちんとした研究が混在していることに問題があるのであり、少なくとも茶の湯文化学会においてはこれまで以上に緻密な研究を基本とし、かつ厳しくその内容を吟味すると同時に、その結果や業績を研究者の間だけでなく、ひろく

茶の湯愛好者にも広める努力を怠ってはなるまい。

二つの夢

倉澤 行洋（第二代会長）

茶の湯文化学会設立二十五周年の会報（百号）の稿をたのまれ、この学会も、はや四半世紀を経過したのかと驚くとともに、学会設立までのさまざまな事が、どっと思い起こされて感無量でした。

思い起こせば、私は、だいぶ前から、茶の学会を作りたいという思いをいろいろな機会に言っておりましたが、それを、おおよけの場ではじめて口にしたのは、平成三年（一九九一）、心茶会創立五十周年記念行事の折でした。そこに居合わせた鵬雲斎宗匠が、「ぜひとも」と激励してくださいました。そして紆余曲折を経て、茶の湯文化学会が正式にスタートしたのは平成六年でした。その間にご支援をたまわった、たくさんの方々、いちいちお名前は記しませんが、ありがとうございますました。

私は、学会設立へと動き始めた頃、それを願う私の思いを一文にまとめ、何人かの方に

見ていただいたことがあります。その最初の部分は、

茶道が、深遠な哲理と豊かな藝術表現とを併せ具えた、世界に類例のない優れた総合文化体系であることは、だれにも異論のないところでありましょう。この茶道がますます隆盛におもむき、これを学問的に研究する人の数も徐々に増大しつつあるのはご同慶の至りでありますが、反面、これらの研究者を総合する全国規模の学会が未だ存しないのは甚だ遺憾と言わざるを得ません。学会があれば研究者相互の交流啓発が容易になり、茶道の多面的総合的研究がいつそう進展するでありましょう。

「茶道学」（「茶道文化学」）が確立し、他の諸学に伍して独立した学として学界における市民権を獲得すれば、大学をはじめとする教育研究機関における茶道観も変わるでしょう。茶道研究者が肩身の狭い思いをしているというような悲しむべき現状は打破され、やがては「茶道学」（「茶道文化学」）の講座や学科が設置され、そこから生まれる茶道研究者は、「茶道学」を進展させるとともに、そのことによって、茶道文化そ

のものの進展にも大きく貢献するものと期待されます。このような期待を現実のものとするためにも学会は不可欠です。

この稿の題に「二つの夢」と書きましたが、これが、学会設立にかけた第一の夢でした。この夢はしかし、会員の皆さんの積極かつ活発な活動によって着実に実現しつつあり、もはや夢ではなくなっております。

もう二十年以上も前のことになりましたが、私の弟子で、後に学位論文をもとにして『茶から茶道へ』という名著（平成十年 市井社刊）を出し、北京大学教授にもなった東君（藤君）さんが、留学先の日本の大学に学位請求をした際、こんなことがありました。受け取った大学の教授会で、それは文学部の教授会でしたが、この論文を受け取った旨の報告があつた時、一教授が、「砂糖の研究が文学部に提出されるとは！」と不思議がったのです。「茶道」を「砂糖」と聞き間違えたのです。こんな間違いが起こるところにも、「茶道」が、文系の大学からいかに疎遠だったかが現れています。しかし、今ではもう、こんなことは起こらないでしょう。

第二の夢については、こう書きました。

二十世紀が終わりを告げようとする今、長きにわたった西洋による歴史主導に翳りが生じ、東洋が新たな視野で見直され、重みを増しつつあります。この時にあたって、東洋文化の精華である茶道を深く究明することは、世界文化的な意義のあることです。

ここにいう「世界文化史的意義」の内容は「東洋西洋両文化の総合への歩み」です。

歴史書を紐解き「大航海時代」とも呼ばれる十六世紀頃以降の世界史を大観しますと、歴史の動きのリーダーシップをとってきたのは、好むと好まざるとにかかわらず、ヨーロッパを中心とする「西洋」でした。「東洋」ももちろん歴史を動かす力を發揮していましたが、「西洋」ほどではありませんでした。

しかし十九世紀～二十世紀になりますと、その西洋の精神世界に、或る暗い翳がさしてきました。それはニーチェによってニヒリズムと呼ばれた事態で、自己を根底から支えてくれるものは何も無い、神も死んでしまっている、という思いです。

元来、西洋の人々の精神世界には、それを支える巨きな、強力な柱が二つありました。その一つはユダヤ教からキリスト教へと連なる宗教の伝統で、これはヘブライズムと呼ばれます。そしていま一つは、古代ギリシア文化の中で固められ、西洋全体に普及していった、人間のみが持つ、高度な知性への信頼で、これはヘレニズムと呼ばれています。有名な、デカルトの「我考える、故に我あり」、パスカルの、人は「考える葦」もこれに連なるものです。

ニヒリズムは、先ず神の存在への疑念として現れてきました。その行きつくところは、神が人間を造ったのではなく、人間が神を造った（空想した）という考え方です。ヘブライズムはこの疑念にさらされるようになります。

やがてヘレニズムにも疑惑の目が向けられます。牧場に遊ぶ動物たち、空飛ぶ鳥たちは、本能の命ずるままに動くので、悩むことはありません。苦痛はあっても苦悩は無いのです。しかるに人は、高度な知性があるが故に悩みがあるのです。その悩みの中で、「人だけが、考えるべく罰せられている」という嘆きも出て来ます。思い起こせば、既に『聖書』にも、

知性への否定的な見方がありました。アダムとエヴァは、「知恵の木の実」を食べて神の怒りを買ったのです。

このようにして、西洋の人々の精神世界を支える巨きな柱が、二つとも頼りにならなくなりつつあります。ニヒリズムの深化です。二十世紀になると、遂に『西洋の没落』という本がシュペンゲラーによって著され、大きな反響を呼ぶことになりました。

こうして西洋の精神世界は、それを支える二つの大きな柱の弱体化によって存亡の危機に直面しようとしています。そして人々の目が今まで軽く見ていた東洋へと真剣に向けられるようになってきました。

こうして、「東洋」に真剣な目を向けるようになった「西洋」の人々に、私たちは何を見せればよいのでしょうか。「東洋文化の精華」である「茶道」はその中のいちばん大切な一つであると私は考えております。

ここ三千年ほどの世界の文化史を大観しますと、東洋と西洋とは、それぞれの文化のあり方の基本に大きな違いがありました。それは、「自然万物と人との関係」の見方において特に顕著でした。どう違うのかといえ

ば、「人は万物（神を除く）に勝る高度な存在、人以外の物は、人のためにあり、人が自由で使用消費してよいもの」——これが、西洋の人々の大方の認識でした。これに対して、東洋の人々の認識は、「人と人以外の万物は、基本的には同じもの、したがって平等のもの」というのでした。

なぜ人のみが特別に高貴な存在であるかといえば、神が人のみを、神に似た者 (imago dei) として作ったからというのが一つ。いま一つは、人のみが、他の何物にもない高度な知性を持っているから。これが西洋の人々の出した答えでした。このような観じ方は、人本位主義（略して人本主義、Humanism）と呼ばれます。

これに対して、東洋の人々の観じ方は、「天地与我同根万物与我一体」「山河大地日月星辰同一仏性」「梵我一如」「自然自己一元の生」などの言葉によく表されています。このような観じ方は、「自然本位主義」（略して自然主義、Naturalism）と呼ばれます。

先に「東洋西洋両文化の総合」と申しましたのは、言い換えれば、「東洋的自然主義と西洋的人本主義の総合」ということにほかなりません。

第一の夢は着々と実現に向かっています。第二の夢の実現はまだまだこれからです。そもそも茶道は、自然本位の文化の最たるものです。釜の煮え音を松風と聞き、湯水を使う音は溪谷のせせらぎと聞き、柄杓を蓋置に引く音は深山幽谷にこだまする斧の音と聞く。床の花に飛花落葉の四季の移りを観じる——小さな茶室には、大自然が凝縮されています。

私は、茶の湯文化学会の方々が、私の第二の夢の方向に、これまで以上に注目していただきたいと思います。

大きな期待

中村 昌生（初代会長）

（本稿は、会長を退任された際の、二〇〇一年九月発行会報三十号巻頭文を再度掲載させていただきました。）

茶の湯に関する研究は、いろいろな学問の分野で進められてきました。個々の研究が茶の湯という共通の土俵で、報告され討議されることはありませんでした。諸領域で茶の湯にかかわる仕事をしている研究者は孤独でし

た。ある夜、そんな研究者が「学会を作りましょう」と集まりました。衆議一決、設立に向って急速に諸準備が進められ、茶の湯文化学会の設立総会が開催されたのは平成五年十月十六日のことでした。

そこで私が会長に指名されました。任期は二年と定められていましたが、全くその器ではないのに、続投を繰り返して、今年五月の第九回総会において新会長に倉澤洋先生が選ばれ、やっと私の退任が許されることになりました。

この学会は実に異色な学会であります。茶の湯に関心のあるものはすべて入会できる。従って会員の専門は多領域にわたっており、学術研究者だけで構成されているわけでもない。運営を委任されている理事諸氏は、それぞれの学会に所属しておられますが、既成の学会の慣例がすべて新しい学会に馴染むとは限りません。試行錯誤を重ねてゆかねばならない問題が山積しました。こうした学会にとって大切な揺籃期、成長期に微力な会長を支えて、学会の基盤を構築してくださった副会長、理事の諸先生に厚くお礼を申し上げます。

学会の設立趣旨は、会誌「茶の湯文化学」

第一号に記したとおりであります。学会の目標は共通の土俵を作つて、総合的に茶の湯の研究を推進することにあります。これまで異なつた分野の中で行われてきた茶の湯に関する研究にも優れた成果がありました。そうした成果や今後の研究が、一つの土俵で交錯することによって、総合的な茶の湯学の発達と熟成を期待することができるとおもいます。

近來進歩を見せる茶の湯研究の成果をもつてしても、研究者が心底深く確信している茶の湯文化の深遠な魅力を、国内外の人々に理解させるだけの説得力を発揮できていないのはなぜか、それは共通の土俵がなかつたからではないでしょうか。

すでに六世紀にも及ぶ歴史をもつ茶の湯の研究はまず歴史的な研究が基礎となり、史料収集の努力が不可欠であります。しかしこの作業や方法にとどまり、史実の検証にだけ終始してはならないと思います。

茶の湯はどの部分をとりあげても、人や個性とかかわり、心の動きと無縁な部分はありません。点前においても、僅かな作法や道具の置き方に、亭主の心遣い、心の機微が示されます。それは順序や型にはあらわれないも

のです。また道具の取り合わせ方にも亭主の心の働きが反映します。

道具類にしても、例えば一つその茶碗にも作者のさまざまな好みや意図が働き、作者の心中に宿る茶の宇宙が託されているのです。

茶室の写真集を見て、「どれもこれも同じように見える」という人によく出会います。しかし、おのおの間の僅かな相違こそ大切で、そこから作者の創意を読みとることができるとおもいます。

私の若い頃の入門書は、桑田忠親先生と西堀一三先生の茶道史でした。桑田茶道史には物語を聞くような楽しさがあつたし、西堀茶道史からは、たんに茶の湯の史実を教えられただけではなく、昔の茶匠たちの心の働きのようなものが伝わってきて、茶の湯の世界に強く引き寄せられてゆくようでした。利休の茶を探求して、史料を渉獵し『利休の茶』（岩波書店刊）の大著を世に送られた堀口博士は、その序文のなかで「茶の湯の心を知りたい」のが研究の目的であると述べられています。先生は西堀先生とも心の通う交わりを結んでおられました。茶の湯の心を探究するという学問の道においても、志を共にしておられたのだと思います。

一九五〇年代に比べると、今日茶の湯研究の条件は遙かに向上しています。新史料が掘り起こされ、秘蔵された史料の所在もかなり周知できるようになり、複写も容易になりました。如何に史料が豊富になつても、特定の問題の解明にはなお史料の探索と複雑な考証が必要となるのはいうまでもなく、史実の追求には限界はありません。

そうした歴史的な事象の解明と共に、その背後を照らし出す考察がもっと進められてよいのではないのでしょうか。新しい作品が紹介され、それが生まれた歴史が明らかにされると同時に、その作者はどのような心の構え方でそれを創り出したか、作者はその作品にどのような思いを託そうとしたかなどを、知ることが重要であると思ひます。

茶の湯という文化は、多岐にわたつていて実に複雑な構造を持ち合わせています。史実の検証による構造体の外側の探査だけでなく、内側からの探査に挑むことは、茶の湯の実体に肉薄するために有力な道ではないでしょうか。

今回哲学・美学を専攻される倉澤先生が会長に就任されたことによって、茶の湯文化学におけるそうした新しい道が推進されるであ

ろうと、大きな期待を寄せています。

理事會

第一回理事会が、平成三十年十二月二十三日（日）午後二時より同志社大学徳照館会議室において行われた。理事十九名が出席し、会長の挨拶の後、中村修也副会長の司会進行で以下の議題について討議が行われた。

- 一、各担当理事より事業報告
- 二、平成三十年度総会・大会についての報告
- 三、二〇一九年度総会・大会について
- 四、会長候補選考委員会の編成について
- 五、茶の湯の無形文化財指定について
- 六、会誌・会報について
- 七、その他

第一号議案では、各担当理事より各地例会について、それぞれ報告が行われた。

第二号議案では、平成三十年度総会・大会を、初めて島根県松江市で行ったが、松平不昧公没後二百年ということで、多くの島根県民・松江市民も参加し大盛況となった。また、「ぼてぼて茶」の実演も好評であった。今回、

島根県・松江市より補助金をいただき、学会の負担金が抑えられた旨、報告がなされた。

第三号議案の二〇一九年度総会・大会については、六月十六日（日）に同志社大学で開催し、大会のテーマは「茶書研究の現在」、シンポジウムのコーディネーターは熊倉功夫会長が担当することとなった。また六月十五日（土）に見学会の開催が提案され承認された。研究発表の公募は、ホームページ「ご案内」で行い、発表者が多い時は、大会テーマに添ったものを優先させることが承認された。

第四号議案では、会長候補者選考委員会委員の選出が行われ、池田俊彦理事、田中秀隆理事、原田茂弘理事が委員に推薦され、承認された。これに伴い、次回理事会までに委員会を開催し、会長候補者を選出し、総会にて決定することが決まった。

第五号議案では、茶の湯の無形文化財指定について、熊倉会長より、文化庁へのアプローチは進展がなく、小委員会で「茶の湯の定義」をまとめている最中で、それが決まり次第、家元・研究者等に働きかけ、協議会を作り、進めていきたいとの報告があった。

第六号議案では、会誌について山田理事より、会誌三十一号を編集作業中で、平成三十

一年三月末発行予定である旨、報告された。

また、「会誌編集委員会規程」における、

三、編集委員の任期は二年とする。

再任を妨げないが、三期を超えぬものとする。

四、編集委員は査読者を兼ねない。

の規程のうち、三の「再任を妨げないが、三期を超えぬものとする。」「四、編集委員は査読者を兼ねない。」の規程文を削除することが提案され、総会にて議案として提案されることが承認された。

会報について池田理事より、第一〇〇号は特別号とし、歴代の会長に「会報一〇〇号二十五周年を記念して」と題して寄稿をお願いしてはどうかという企画が提案され承認された。故中村昌生初代会長の文章については、会長職ご退任にあたっての会報三十号（二〇〇一年九月発行）巻頭文「大きな期待」を再度掲載することとなった。また、一〇一号より表紙デザインを変えてはどうかということが提案され、会誌・会報・名刺等のデザインのロゴも統一していく方向で考えてはどうかという意見が出、承認された。

第七号議案では、神谷理事から昭和美術館の後藤さち子氏の幹事推薦があり承認された。

例会のご案内

東京例会

六月二十九日(土) 午後二時

(会場：東京芸術大学 美術学部)

第三講義室中央棟

「松平親良と瓢々庵について」 依田 徹

「明治十年代における茶道具の売立価格と

購入者―三井銀行幹部による加島屋広

岡家の茶道具の入札会の分析より―

高原 明子

七月二十七日(土) 午後二時

(会場：五島美術館)

「近代数寄者の表装」

濱村繭衣子

「茶の湯とトランジショナル様式(仮)」

砂澤 祐子

静岡例会

五月十日(金) 〱十二日(日)

(会場：茶の都ミュージアム)

「第七回世界お茶まつり」(共催)

東海例会 (会場：昭和美術館) 午後二時

入館料五百円

四月二十七日(土)

「茶の湯釜―名物記と茶会記からたどる―」

竹内 順一

六月二十九日(土)

「佐竹本三十六歌仙絵にみる近代数寄者と

文化財保護」

降矢 哲男

近畿例会

四月二十八日(日) 午後二時

(午後一時半開場)

「京焼の煎茶趣味にみる異国趣味」

(会場：泉屋博古館 講堂)

梶山 博史

「『中国文房具と煎茶』展について」

竹嶋 康平

*共催：泉屋博古館

*当日は『中国文房具と煎茶』展開催中

です。学会員は、会報送付の「学会の封筒」

を受付にてお示しください。当日のみ無

料でご入館いただけます。

北陸例会

九月二十一日(土) 「未定」

金沢例会

四月七日(日) 午前九時半

(会場：金沢市湯涌温泉江戸村)

江戸村茶会(第六回)「春爛漫」

六月三十日(日) 午後一時半

(会場：ITビジネスプラザ武蔵

五階第一研修室)

「西王母と東方朔」

川口 法男

高知例会

六月三十日(日) 午前十時〱正午

(会場：高知県立文学館 慶雲庵茶室)

「茶の湯文化学会二〇一九年度大会の研究

発表をテーマとしたシンポジウム」

軽食茶事 正午〱午後四時

席主 三名

会費 千円

総会・大会のお知らせ

二〇一九年度総会・大会を左記の日程で計画中です。詳細は別途ご案内いたします。

六月十五日(土) 見学会(茶道総合資料館)

懇親会

六月十六日(日) 総会・大会